

ビトゥンの日本人墓地から

— 沖縄、南洋、ミナハサ —

伊 藤 眞

I はじめに

以下に記すのはおよそ32年前の1983年、筆者がインドネシアのウジュンパンダン（現マカッサル）滞在中、在ウジュンパンダン日本国総領事館館員とともに起こった北スラウェシのメナド及びビトゥンにおける日本人墓地調査の記述と、それにまつわるミナハサ地方と日本人との関係である。また今日に至って本報告を行うのは、現在では日本人墓地についてはすでに移設整備が行われ、然るべき作業については一応決着がついているものの¹⁾、いくつかの点が見過ごされたままになっていると考えられるからである。本報告でとくに注目したいのは、戦前、異郷の地でなくなった人々がどのような環境にあり、とくに墓碑の多くを幼子が占めていたという点である。

II 戦前におけるミナハサと日本

最初に、舞台となるミナハサ地方について若干述べておきたい。ミナハサ地方はスラウェシ（旧称セレベス）島の最北東端部にあり、首都ジャカルタからの距離およそ3000キロ（飛行機で3時間半）、インドネシアの辺境部に位置する。しかし、1820年以降、オランダ植民地統治下に入り、以後、もっとも早く西洋文化の影響を受け、キリスト教化が進み、かつ教育水準も高いと言われる地域である。この地方の住民は、北スラウェシ州の首都メナド²⁾の名をとって「メナド人」(*orang Menado, Manado*) と呼ばれることが多いが、広くは「ミナハサ人」(*orang Minahasa*) 人である。なお、言語学的には「ミナハサ人」はオーストロネシア語族インドネシア語派フィリピン語系に属し、今日ではその区別は薄らいでいるものの、元来8つの民族集団からなる連合体であったとされる。なお、「ミナハサ」とは文字通り「連合」を意味する。

ミナハサ地方は、インドネシアの辺境に位置するが、戦前の日本との地理的距離は相対的に近く、蘭領東インドへの窓口だった。神戸、横浜から出発し、ミクロネシアのヤップ、パラオなどの島々を経て蘭領東インド（オランダ）に至る南洋航路を利用すれば、蘭領東インドにおける最初の停泊地がメナドであった。

メナドに最初に日本人が定着した確かな時期は明らかでないが、日本人会の開設年度から見て明治末～大正初期には日本人社会がすでに形成されたと考えられる。松田

(2008)によれば、「メナド日本人会」の結成は大正4年(1915年)とされる。少し下って昭和12年にはメナドに日本の総領事館が開館されており、昭和13年8月時点でのメナド在留邦人名簿に記載された日本人は201名³⁾であった。また昭和8年(1933年)にはメナド日本人会から分離して、農園経営者を中心にしたモゴンドウ日本人会が結成、昭和12年には沖縄県人会が設立されていた。一方、漁業者が中心となったビトゥン(セレベス海に面するメナドから約46km、トミニ湾に面する)については、1940年頃の日本人口は140人前後であったとされる。

戦前期の日系企業はおおよそ(1)ココ椰子などの農園経営と農産物の輸出、(2)水産業(カツオ・マグロ漁、鮮魚販売、鰹節製造輸出)、(3)雑貨、製菓販売などの商業に大別される⁴⁾。これらを従業者数から見ると(2)の水産業従事者がもっとも多く、その大半が沖縄出身者であり、ビトゥンを基地としていた。ビトゥンについて、第二次大戦開戦前夜の時期に同地を訪れた新聞記者渋川環樹は著作の中で、つぎのように述べている。やや長いが引用しよう。

「ビートンは邦人の建設した町である。十年前大岩漁業(社長大岩勇氏、40歳、愛知県知多郡豊浜村出身)がこの地に漁場を開いた頃は戸数わずか11戸。現在では戸数400、人口3500と飛躍的に膨張している。(中略)今では200名の邦人が6艘の発動機船に日の丸の旗をかがげ、鰹・鮪を追って一日5千尾という蘭印一の漁獲高をあげ年収益百万円に達している。冷蔵装置、鰹節製造工場もあり、土人の働くもの400名。この土人たちは主にサンギエ島の住民[である]。』(320-321頁)

渋川環樹がビトゥンを訪れたのは1940年末か1941年初頭と推測される。日本人の人口については、先にあげた140人と200人とでずれがあるが、ビトゥンが日本人の漁業基地として急速に発展した様子は、日本が蘭領東インドに侵攻するより約1年前に記された、この、やや熱を帯びた文章からもうかがうことができるだろう。

ミナハサと日本人との関係でもうひとつ付け加えなければならないのは、日本人がミナハサという風土、そしてミナハサ人に対して格別な親近感を抱いていたという点である。それを確かめるには、戦前に書かれた記録や旅行記の最初の数頁を開くだけでよい。年間を通じ24-27℃程度の温暖な気候はしばしば「軽井沢の秋」にたとえられ、そして活火山であるカラバット山は日本人によって「メナド富士」と呼ばれる。あるいは、「メナド」の語源は日本語の「ミナト」であるとまことしやかに語られる。また、ミナハサ人の中に日本人と同じ肌の色の白さ、顔つきを見出し、「ミナハサ人は日本人をかれらの祖先であると信じている」といった記述も見出される。現地を紹介する日本政府刊行物にも次のような記述がある。

「土人ハ面貌、風俗日本人ニ酷似シ、皮膚ノ色他ノ土人ニ比シテ黒カラズ。家屋ノ構

造、垣根ノ作り方、墓碑ノ形状等亦日本ニ類セリ。其ノ姓名中往々我ニ類スルモノアリ。内外旅行者ノ「ミナハサ」ニ至ル者、多クハ「ミナハサ」人ヲ以テ日本人ノ子孫ナリト言ヒ、土人モ亦之ヲ自認シテ日本人ニ対シテハ特ニ親密ナル態度ヲ示スヲ常トス。」(拓務局『セレベス島事情』20頁)

この拓務局による記述には、入植を推進するための政策的な意図が含まれるかもしれないが、同様の記述は民間人の紀行文の中にもしばしば見出される⁵⁾。このような言説が見出されるのは、筆者の知る限りでは、インドネシアにおいてもミナハサ地方だけである。共通祖先説や漂着説はさておくとして、当時の日本人にとって親近感を抱きうる格別な土地として映っていたことは認めてよいだろう。この点については、後でもう一度言及するとして、つぎに筆者の関わった日本人墓地について述べることにしよう。



写真1 「メナド富士」カラバット山をビトゥン市近郊より臨む(1994年11月筆者撮影)

Ⅲ 日本人墓地調査から墓参団実現までの経緯ー『沖縄タイムズ』記事から

日本人墓地調査は日本の厚生省(当時の名称=筆者注)から在ウジュンパンダン総領事館への要請に基づくものであった。そのきっかけになったのは、戦前ビトゥンに

在住した沖縄県人米須良明らの陳情により当時の沖縄県選出の衆議院議員瀬長亀次郎が動き、北スラウェシ州メナド市内の日本人墓地に関する調査を厚生省に対して要請したためである。ただし、この陳情で対象となった日本人墓地とは、戦時中、軍属として徴用された民間人戦没者の墓地であった。以下に、『沖縄タイムズ』紙の見出しと記事の概要をもとに、その経緯を順に追っていくことから始めたい。

・1983年3月11日付け 「沖縄に引き取りたい セレベスに眠る亡夫の遺骨」

山城正雄氏の未亡人石川ヨネさん(68)の訴え。名護市議員志堅徹、大城敬人の協力による。

石川ヨネさん(座間味出身、後石川姓に改姓)は、一昨年、メナド在住の山城アキラ氏からの手紙により夫の墓の存在を知る。ヨネさんは、夫婦でトラック島に出稼ぎに行ったが、昭和16年に子ども2人を連れて引き揚げ。夫はセレベスに渡り、鯉節工場で働くが、まもなく海軍軍属として召集された。昭和18年5月空襲を受け戦死。山城正雄氏にはメナドにも遺児があり、ヨネさんとうまく連絡がとれたのも束の間、遺児は事故で死亡した。遺児の名は、ウェリ・パタマニ日本名山城アキラ、38歳であり、独身のまま1982年死亡した。

・1983年3月14日付け 「セレベス島に眠る肉親の遺骨 “早く引き取りたい”」

石川ヨネさんの記事を読み、国仲茂子さん(55)(国仲富夫さんの妻)が名乗り出る。国仲さんの父親翁長武治さんも山城正雄氏と同じ墓地に埋葬されていることを知る。石川ヨネさんと国仲茂子さんはともに座間味出身であった。戦後、同郷の東憲和さん(故人、旧姓慶良間)が遺髪を持ち帰ったとされる。

・1983年3月22日付け 「来月下旬に「遺族会」結成 収骨・墓参実現へ」

遺族会結成へ。名護市で遺族など15人が集まる。引揚者の米須良明さん、翁長武治さんの三男翁長安雄さん(50)は座間味村から参加。引揚者の渡久地政功さん(59)(本部町在住)も参加。米須良明さんは1974年セレベスを訪れ、独自に墓地調査を実施し、28柱の墓と31人の引揚者リストを確認していた。渡久地さんは、メナド市のカイラーギ橋の守備についていた当時の同僚は空襲で大半が戦死したと証言。米須さんを引き揚げ者の代表、古平さんを遺族世話人代表とすることが決められた。そこでは、沖縄県人と現地の女性との間に生まれた子どもが200人あまりいたとの証言もあった。

・1983年3月27日付け 「セレベス島遺骨収集 実現可能の見通し 山本局長 瀬長氏に交渉約す」

瀬長亀次郎(共産)衆議院議員が厚生省の山本援護局長を訪問。山本局長は外務省を通じてインドネシア政府と交渉を約す。セレベス島には県出身者21人を含む41人の墓があるといわれ、野ざらしの戦没者遺骨も多数あると見られている。

・1983年10月5日付け 「県出身者の墓標も 日本人戦没者新たに18基を確認 イン
ドネシア・メナド地区」

ウジュンパンダン領事館による調査の結果が厚生省より報告される。遺族が調べた12基を上回る18基の墓標を新たに確認、うち明らかに戦没者の廟と確認出来たものは7基であった⁶⁾。

・1985年5月26日付け「確認された県人の墓地 まず二人派遣 念願の墓参が実現 インドネシアセレベス島」墓参実現へ。県内の遺族は6家族で遺族会を結成。名護市名護になる石川ヨネさんの住所も掲載される。

・1985年7月5日付け「セレベス島の墓参決まる 県から5遺族 18日に出発」

厚生省からの正式通知を受け、7月19-26日まで慰霊巡拝に遺族6家族のうち5家族が参加することが決まる。石川ヨネさん、国仲茂子さん、古平秀昌さん(45)、中村八重子さん、古波蔵静さん。石川さん以外は戦没者の子ともである。

・1985年7月19日「40年目のセレベス墓参 5遺族がたつ」

戦後初めてのインドネシアへの遺族会墓参団が出発。米須会長は、「墓参がやっと実現した。現地には軍人・軍属以外の墓も28基あり、その墓参についても遺族会として取り組んでいきたい」と語る。

以上、沖縄からの、セレベス(スラウェシ)島への戦後はじめての戦没者慰霊墓参団の出発までの経緯を「沖縄タイムズ」紙の記事をもとにたどってみた。そこでは石川ヨネ氏の市会議員への訴えがもととなり、それにセレベスからの引揚者である米須良明氏が呼応することで一定の事実が明らかになり、墓参実現までに至ったことがわかるだろう⁷⁾。

米須良明氏は戦前、ピトゥンにあった東インド水産会社に勤務した。同氏によれば、その当時、同社には115名の沖縄県人が勤務していたという。また同氏は1979年に北スラウェシを訪れ、自費で調査をおこない、そこで得た情報をもとにセレベス墓参団の結成を促した。一方、石川ヨネさんは、夫の遺児からの手紙をもとに、メナドで戦死した夫の墓の存在を知り、メナド訪問の気持ちをつのらせていた。このような二人を沖縄タイムズの記事がつなぎ合わせ、さらに国会議員に働きかけることによって、墓参が実現したのである。

IV 在ウジュンパンダン日本国総領事館による現地調査

上記の新聞記事にあるように厚生省の要請で、現地の日本国総領事館が動くことになる。在ウジュンパンダン日本国総領事館はインドネシアにおいて、ジャカルタ、スラバヤ、メダンに次ぐ4番目の領事館として1977年に開設され、スラウェシ島以東の地域を管轄地域としている。

1 メナド市内、シンキルにあるオランダ人墓地

在ウジュンパンダン日本国総領事館は1983年厚生省の要請により、1983年8月に黒澤領事をメナドに派遣した。それに現地職員としてマカッサルに滞在してまもない筆者も同行することになった。黒澤領事も筆者も、ともに北スラウェシは初めての訪問であった。

メナドへはマカッサルから空路でおよそ一時間半、サム・ラトゥランギ空港に到着すると筆者らは、北スラウェシ州社会省の役人の出迎えを受け、翌日から墓地調査が始まった。

最初の調査対象であったメナド市内のシンキル・オランダ人墓地は、事前に北スラウェシ州社会省に所在確認をしていたこともあり、容易にみつかった。ただし、墓地内は管理状況が悪く、一面雑草で覆われていた。しかし、雑草を取り除いていくと、思いの外しっかりとした墓石が姿を現した(写真2及び3を参照)。墓地内で見出された16基の日本人墓のうち6基にははっきりと「故海軍々属」と明記されていた。次に16基の墓碑銘(一部判読不可の部分について「□」とした)を示す。



写真2 オランダ墓地内の日本人墓(1983年8月筆者撮影)



写真3 オランダ墓地内の日本人墓 中央の墓は墓碑銘がはっきりと読み取れる。(1983年8月筆者撮影)

1	故海軍々属 山城正雄之墓 昭和二十年五月二十九日	9	中村靖子之墓
2	故海軍々属 古波蔵艦徳之墓 昭和二十年五月二十九日	10	大正拾一年四月十一日 奥田甚三郎 行年八ヶ月
3	故海軍々属 翁長武治之墓 昭和二十年一月三日	11	故笠間啓介之墓 福井県人 行年四十 大正拾年
4	故海軍々属 仲村渠 蒲之墓 昭和二十年二月二十日	12	□村治□□
5	故海軍々属 渡久地平則之墓 昭和二十年五月二十九日	13	□□□ 昭和二年十一月 福岡縣 行年六ヶ月
6	故海軍々属 増田誠吉之墓 昭和二十年五月二十九日	14	加来秀子之墓
7	加来俊太郎之墓 昭和二十年三月九日	15	命名山城幸雄 大機現成嬰女子 大正八年四月
8	岩手□□之墓	16	俗名 □田大助

墓碑銘の形式は軍属のものを除くと必ずしも一定していなかった。軍属の場合、墓の形態が同一なのは、同時期に建立されたためであろう。他の墓については、墓碑銘の判読が困難な場合が多く、たとえ判読可能でも記載内容にばらつきがあり、それぞ

れの建立時期にも隔たりがあった。古いものとしては、15にあるように大正年間に建立されたものが3基あった。筆者らは、各墓の墓碑銘を出来る限り記録し、写真撮影した後、そこでの作業を終えた。なお、写真2からもわかるように、軍属の墓碑銘には墨が入れられていた。これは先の米須良明氏によるものかもしれないが未確認である。

2 ビトゥンの日本人墓地と大岩勇

つぎに訪れたのは、メナドから約50キロ程離れたビトゥンである。セレベス海に面したメナドから半島を縦断し、車で1時間もすればトミニ湾に面したビトゥン港に着く。ビトゥンは愛知県豊浜出身の事業家大岩勇氏が造船所、そして鋸節工場を建設したところであり、戦前はあたかも日本人村として賑わっていたようである。ただし、日本人墓地の存在の事前情報としては、港の近くにどうやら日本人の墓があるらしいという不確かなものであった。地元の人に訊くと、なにやら漢字らしき字が刻まれているが、墓の形状は中国人のものとは異なる、それで日本人のものではないかという答えであった。その場所に案内されると、道路をはさんで墓地の向かい側に日系の缶詰工場があったのでたずねて見ると、そこで働く日本人従業員は指で示しながら、そのあたりに日本人の墓があるらしいが、自分は確かめていないという。道路から近いところにある墓地は、クリスチャンとムスリムの墓である。日本人のものと思しき墓はその奥にあるというが、その周辺は、身の丈ほどにも伸びている雑草や太い幹をもつ小木で覆われており、山刀で切り開きながら進まなければならなかった。奥まで進むと、墓石らしきものの突端がかろうじて見える場合がある。土砂で半ば以上埋もれているものが多く、しかも墓石の先端までツタ状の雑草がからみついている。それらをひとつひとつ取り払ってもらうと、風化されやすい石質ではあったが確かに日本で見慣れた形状の墓石が姿を現した。刻まれた文字もなかなか判読し難かった(写真4、5参照)。それに立ち会ってくれた地元住民によれば、こうした日本人の墓は全部で29基あるとのことであったが、我々が識別し得たのは24基であった。この他に墓石はあるものの、全く判読不能の墓標が3柱あった。これを加えると27柱になるが、住民の言う数にはまだ及ばなかった。

見出された墓碑銘のスタイルには、おおよそではあるが共通性が認められた。まず没年、次に故人の姓名、(出身地)、行年が記されている。出身地の地名(那覇市1、渡嘉敷1、伊平1、八重1)あるいは苗字から、大半が沖縄出身者もしくはその子どもと判断されるが、そうした墓の三分の一が十二歳未満(10基)、そのうちでも行年一歳(5基)がその半数を占めていた。いずれも個人墓である。○○家之墓といった形式の集合墓は見出されなかった。

1	一九三四年九月二九日死去 故比嘉松樺之墓 沖縄懸那覇市 行年二九歳	13	昭和十七年七月十八日死去 故高良三郎之墓 行年四十四才
2	昭和一一一年六月一〇日死去 故比嘉正信之墓 行年一歳	14	(不明)
3	昭和一二二年九月一四日死去 故比嘉富子之墓 行年一歳	15	□原 之墓 行年一歳
4	昭和九年三月二二日死去 故本多美弥子之墓 行年五歳	16	昭和一二、八、一八日死去 故□慶朝順之墓 行年一一歳
5	昭和拾壹年拾月四日死去 故中曾根勇之墓 行年一年(ママ=筆者)	17	昭和一四年九月二十五日死 故比嘉洋子之墓 行年二歳
6	昭和一九年三月一三日死去 故新垣健一之墓 行年九歳	18	昭和十二年十一月□□ 故並里三雄之墓 行年二十五歳
7	千九百三十九、六、九、死去 故○○○栄子之墓 行年□歳	19	昭和十四年八、二十八死去ス 故田畑並正之墓 行年一歳
8	昭和二、二、三、没 與那嶺三郎之墓 行年三六歳 本籍地沖縄懸島尻平渡嘉敷村字渡嘉敷	20	NAMIMASA. TABATA 28-8-1939
9	昭和一四年一二月一三日死ス 故池田増蔵之墓 行年三六歳 沖縄懸島尻郡伊平村字前	21	□□□墓(判読不可、「墓」の文字だけ確認)
10	昭和拾参年壹月□□ 故古波蔵清吉之墓 去年(ママ)四□□ 沖縄懸島尻郡伊平村	22	昭和拾四年一月十四日死去 故伊藝平信之墓 行年二歳
11	昭和拾三年三月 故伊禮良三□□ 沖縄懸八重郡	23	池原 S.IKEHARA
12	昭和一五年九月二十日死去 故與那嶺亨之墓 行年四十三歳	24	TJIOKO UEMA 6-3-1941



写真4 ビトゥンの日本人墓地 右側には倒れた墓石、草むらの影にも墓石が見える。(1983年8月筆者撮影)



写真5 ビトゥンの日本人墓地 雑草を伐採した後に姿を現した墓石。根元は土砂で埋まっている。(1983年8月筆者撮影)

3 大岩勇と大岩トミー氏

このビトゥンでの日本人墓地での作業を終えた後、私たちはビトゥンに居住する大

岩トミー（富）氏を訪れた。トミー氏（1931年生まれ）は大岩勇と現地女性（サンギル人）との間に生まれた。日本のインドネシア侵攻（1942年2月）より1年前、少年～青年期の11年間を日本で過ごした⁸⁾。その後、母親の面倒を見るためにビトゥンにもどったという。その当時母親の生活はかなり困窮していたらしい。トミー氏は一時期、日系会社の連絡員をしていたこともあったというが、面会した時点では和風の黒塗りの下駄を製作し、メナドの間屋に卸していた。トミー氏からは主として父親の大岩勇氏について話をうかがった。以下、藤林（2004）で補いつつ、大岩勇について略述しておこう。

大岩勇（1902-1945）は愛知県豊浜の出身、船大工としてパラオを経てメナドに至り、1932年造船業を開始した後、大岩漁業を設立した。その後も日系の漁業会社である日蘭漁業会社（1929年鹿児島県人が設立、カツオ・マグロ漁を主とする）、ビッジャク組合（沖縄漁業者の組織でカツオ漁を主とする）を吸収合併し事業を拡大、開戦を契機に彼の会社は東インド水産会社に組み込まれたが、大山勇は専務取締役役に就任した（藤林：83）。大岩勇の急速な事業拡大は、オランダ政庁をして「カツオ漁の王様」と呼ばしめるほど当局に一目置かれる存在であったという⁹⁾。



写真6 右端から大岩トミー氏とお嬢さん、黒澤領事。（1983年8月撮影）

大岩トミー氏によれば、ビトゥンで生産された鰹節は荒節ではなく、本節¹⁰⁾であり、多くが日本に輸出されたという。要するに、ビトゥンで働く多くの日本人が大岩勇のもとで働いていたことになる。先述した沖縄からの墓参団を組織した米須良明氏も東インド水産の勤務であった。また、ビトゥン日本人墓地内で見出された「9. 池田増蔵」

も、昭和13年調べのメナド日本人会名簿によれば職業欄に漁業ビッジャクとあり、後に大岩勇の傘下で働いていたことがわかる。大岩勇は日本がインドネシア侵攻するや軍属となったがいったん用務のため帰国した。しかし、再び日本からビトゥンに向かう途上、釜山沖で米軍機の砲撃を受け乗船していた運搬船は沈没、戦死した。1945年5月のことであった。

V その後の日本人墓地調査

1 沖縄での調査

1983年の墓地調査は、戦没者については墓参団を実現させるまでに至ったが、ビトゥンの日本人調査は、日本政府による戦没者墓参対象とはならなかった。それはたとえ異郷における死であっても平時における死と同等と見なされたためであろう。しかし、筆者自身には、いくつかの疑問が残った。ビトゥンの墓地を見る限り、沖縄出身者が多いことはわかるが、どのような経緯ではるかセレベスまで至ったのか¹¹⁾、そして墓碑銘からわかる数多くの乳幼児の死はいかなる理由にもとづくものであったのかという点であった。

ビトゥンを訪れてから時を経ることおよそ15年後、筆者ははじめて沖縄県を訪れる機会を得た。まず訪ねたのは追い込み業で著名な糸満であり、つぎに県の地方史編集協議会の方々にも墓碑銘情報を提供し、地元出身者との関連性を訊ねた。

糸満での調査の結果は意外なものであった。まず、筆者が提示した墓碑銘リストの中には、糸満出身者と思われる人物は見出されなかった。これは糸満出身者がミナハサー地方を訪れていないということではなく、墓碑銘の中に見出されないという意味である。糸満漁民が追い込み漁法を用いるのに対して、ビトゥン周辺のカツオ漁は漁法と異なることも一因だろう。また、一般に「糸満漁師」というと、海外に雄飛し、とりわけ追い込み漁をおこなうことで知られるが、その船団に加わる者は必ずしも糸満出身者であった訳ではなく、他地域から糸満の漁業者に水夫として雇われた者も数多く含まれた。さらに筆者は糸満市では市史編集所から戦前のセレベスに渡航した戦災者リストを閲覧させていただいた。それによればリストに掲載された44名中、軍人として赴いた者6名と防衛隊2名を除くと、36名が一般住民としてセレベスに赴き31名が帰国、一般住民でセレベス死亡した者は5名とされているが、死亡場所については特定されていなかった¹²⁾。

糸満では、生存者の一人、金城K氏に話しをうかがうことができた。氏は15歳でマカッサルに赴き、港近くのウジュンタナで番屋の料理を担当していた。しかし開戦に至り、オーストラリア軍によって拿捕され、戦時中はオーストラリアの捕虜収容所で抑留生活を送った。敗戦後帰国したが、アメリカ軍占領中の沖縄にはしばらく入国できず、熊本滞在を経て沖縄にもどることができたという。漁業従事者の中には、K氏

と同様、開戦直前の時期にオーストラリア軍によって抑留された者が多かったという。糸満では、筆者は地域史編纂協議会宛に次のような文章を配布した。

「地域史編纂委員の皆様へ

『旧蘭領インド、とくにセレベス島への出稼ぎ・移住者調査についてのお願い』

私はインドネシアの南スラウェシ社会の社会人類学的調査研究に携わっている者です。この機会を借りまして皆様をお願いしたいのは、戦前のセレベス島に出稼ぎ・移住経験のある方をご存知でしたら是非ともお教え下さいということでもあります。

戦前のセレベスには、北スラウェシ州のメナド、ビトゥン及び南スラウェシ州のマカッサル（現ウジュンパンダン）を中心に沖縄県出身の漁業関係者（追い込み漁、鯉節製造）が数多く滞在したことが漁業史資料などから知られています。けれども、そこで人々がどのような暮らしをしていたかについての資料はこれまでのところほとんどありません。もしその当時の様子をご記憶の方がいらっしゃれば何卒お知らせください。また、メナドとビトゥンには少なくとも二カ所、十数柱の日本人（大半が沖縄県出身）の墓がまとまって見出されます。メナド市内の墓については、1983年読谷村の米須良明氏（故人）が中心となってセレベス戦没者遺族会が結成され、墓参が実現しました。けれども当時は、戦没者が対象ということもあり、ビトゥンの墓については墓参の対象とはならなかった模様です。

私自身、ビトゥンの墓については、1983年8月、1994年11月と二度訪れる機会がありました。現地のイスラム教徒とキリスト教徒の墓地の背後にあり、草やツタが繁茂し、墓石は全く見えない状態です。その草を取り除くと、半ば土砂で埋もれた墓柱が現れますが、墓石は著しく風化し、刻まれた墓碑は一部しか読みとることができませんでした。10年の間に風化の度合いもひどくなっています。地元住民によればそこには28柱の日本人の墓があるとのことでしたが、確認できたのは24柱のみです。ここに読みとれた限りでの墓碑銘を記させていただきます」。

（墓碑銘リストは省略）

しかし、協議会への以上の問い合わせについても、リスト上の人物に直接つながるような情報はえられなかった。ただし、リスト中の人物は、墓碑銘から見て本島ではなく、座間味、渡嘉敷、伊平屋など離島部の出身者が大半を占めるのではないかとの見解を糸満市史編纂部の金城善氏より得た。この示唆は、次の機会の座間味訪問につながるのだが、その前に現地での日本人墓地整備の動向について述べよう。

2 長崎節夫氏の調査

先述したように、メナド市内の日本人墓地については墓参団の巡拝というかたちで

ひとつの終結を見たが、ビトゥンの日本人墓地については注目されないまま、十有年余りの時が過ぎた。

しかし、その後、沖縄県池間島出身の長崎節夫氏により、再び土砂に埋没されていた墓地が発掘され、あらためて世に問われることになる。

「琉球新報」は1997年6月20日付けで「インドネシア・旧セレベス島 雑草茂る中から墓標 県出身者らの墓15基 出稼ぎで海軍に徴兵 平良市の長崎さんが発見」という大きな見出しで報道されている。

長崎節夫氏は北スラウェシ日本人会誌第9号に「ビトゥンの日本人墓」と題して、墓碑銘の確認リストを掲げている。そのリスト（メナド10基、ビトゥン14基）によれば、筆者の記録したものとの若干の異同がある。墓石数が少ないのは、風化によりそれだけ判読が困難になったものと考えられるが、一方で筆者が確認し得なかった新たな追加も若干ある¹³⁾。

ビトゥン		
氏名	没年月日	享年／その他
与那嶺 亨	昭和15年	
伊礼 良貞	昭和14年	
伊礼 徳一		
並里三雄	昭和12年11月	2歳
比嘉 松樽	昭和9年9月29日	29歳
池田 増蔵	昭和14年12月12日	36歳
古波蔵 清○		
池原 盛増	昭和14年12月8日	30歳
高良 三郎	昭和17年7月28日	44歳
祖慶 朝順	昭和12年8月18日	2歳
田端 並正	昭和14年8月26日	1歳
中宗根 勇	昭和15年	1歳
新垣 健		9歳
Y.IDEMORI	昭和14年	1歳

メナード（オランダ墓）		
氏名	没年月日	享年／その他
仲村渠 茜	昭和20年2月20日	海軍軍属
渡久地 平則	昭和20年5月19日	同上
山城 正雄	昭和20年5月19日	同上
古波蔵 鑑徳	昭和20年5月19日	同上
翁長 武治	昭和20年1月3日	同上
増田 誠吉	昭和20年5月19日	同上
加來 俊太郎	昭和20年3月9日	同上
加來 秀子		
中村 ○○		
大槻 ○○		

しかし何よりも重要なことは、氏が墓地についての今後の取扱を在マカッサル日本国総領事館と北スラウェシ日本人会に働きかけ、最終的にそれまで放置状態にあった日本人墓地が移設整備されたことである¹⁴⁾。

その7年後の2004年6月、ビトゥン市において北スラウェシ日本人会主催による日本人墓地・慰霊碑の除幕式が執り行われた¹⁵⁾。ここまで漕ぎ着けるまでには、沖縄での資金集めやビトゥン市との交渉など大変なご苦労があったと想像されるが、最終的に敷地面積約400㎡を擁する新たな日本人墓地が誕生することになったのである。

VI まとめ—沖縄人と南洋

1 沖縄人の移民

この過去の墓地調査を跡づける作業のなかで生じた疑問は、沖縄人がいつ頃から北スラウェシに至り、それが日本の蘭印への進出とどのように交錯したかということであった。

沖縄移民の嚆矢としては、「移民の父」と呼ばれる当山久三による1899年(明治32年)ハワイ島への約30人の移民が知られる。しかし、東南アジアへの移民はいくらか遅れ、1912年(明治45年)シンガポールへ25人が追い込み漁業で移民、翌年の1913年ジャワへ追い込み領漁業で5人の渡航が最初である。さらに蘭領東インド・セレベスへは1921年(大正10年)7人が移民とある(田港朝和「沖縄移民年表」より)。メナドの墓碑銘を見ると大正8年を没年とする者があるので、メナド在留者の一部はシンガポールなど他地域からの転入の可能性もあり、実際には明治末期～大正初年ころにすでに始まったと考えてよいだろう。蘭領東インドへの沖縄人の移民は、同時期の内地からの移民が商業に傾斜していたのに対して、もっぱら漁業中心であり、しかも日本人の漁業活動の大半を、必ずしも事業主ではないにしても、沖縄人が担っていたと考えられる。

南洋における日本人の漁業史を考証した片岡(1991)によれば、蘭領東インドにおいて日本人漁業が台頭するのは1920年代後半からであり、それ以前、オランダ政庁は、とくに日本人漁業者に対しては軍事的観点から沿岸域を測量させないという外国人漁業を規制する方針をとっていた(片岡:89)。こうした規制による日本人漁業の停滞が右肩上がり転じるのは1920年代後半からであり¹⁶⁾、それ以前には真珠養殖、貝採取を主としていたものが鮮魚供給型へと転換、その中心になったのが沖縄県人による追い込み網漁業であったと片岡は指摘する(同書:91)。この模様をメナド周辺部で見ると、まず1922年に金城亀ら30人が追い込み網で進出、メナドより北方のサンギへには玉城徳組¹⁷⁾が、タラウド諸島には玉城徳太郎組が曳き網、曳き網で操業している。この中で金城組が1927年以降勃興している鰹漁に転換した(同書:92)。1920年代後半、先に挙げたサンギへの玉城徳組、タラウド諸島の玉城徳太郎組は不況で解散、メナド

の金城組も大岩漁業に吸収されることになる。大岩漁業は、ビトゥンでの鰹節製造のみならず漁業活動をテルナテまで進出させており、開戦後には東インド水産会社に吸収されるものの、漁業部として事業は継続・拡大させている。こうした比較的近代的な会社組織をもつ、大岩漁業から東インド水産会社への吸収発展の中で、同業者組合に基づく沖縄県人の漁業活動が対抗することは困難で、沖縄県人は、経営の主体としてではなく、漁業の担い手として、活動を継続していったのである。

2 ミナハサと日本

最後に、冒頭で掲げたなぜ乳幼児の墓碑銘が多かったのかという問題に移ろう。それを考えるにあたり、まずビトゥン、メナド(両地域はミナハサ地方の一部をなす)における日本人社会が出稼ぎ者や駐在者から構成される移民社会であった点に留意しなければならないだろう。しかも、その移民社会は人口学的にみて男女人口性比が極めて不均衡であり、決して安定した社会ではなかった。農園経営者あるいはメナドなどで商業を営む都市生活者の中には家族の同伴者もあったが、一方、漁業者従事者の場合、独身、あるいは妻を祖国に帰して単身でこの地にとどまっている。そうした単身者が現地女性を一時的な伴侶とすることは決して珍しいことではなかった。

後年、筆者は、戦前ビトゥンで生活した経験をもつ座間味出身の小嶺S氏と那覇で会うことができた。座間味島村を訪れた際、那覇で入院中の父親が戦前ビトゥンにいたから話を聞いてみてはどうかと、S氏の息子さんに勧められ、連絡をとってくれた。S氏とは短時間ではあったが、話を聞くことができた。東インド水産会社に勤めたというS氏によれば、その当時ビトゥンには混血児が200人前後はいたという。これは先述した1983年3月22日付けの沖縄タイムズの記事とも一致する。いうまでもなく、単身者と現地の女性との間にできた子どもである¹⁸⁾。そしてその一部が幼い時にマラリアに罹って亡くなったということだった。ビトゥンの日本人墓地にある幼子の墓とは、そうして亡くなった混血児の墓だということだった。

実は、沖縄では幼くして亡くなった乳幼児を門中墓に入れる習慣はなく、墓を作らないか、作ったとしても門中墓とは別個に小型の墓を設けることが多いといわれる。そうした、あまり顧みられることが少ない乳幼児のための墓が異郷の地において設けられたことにはいくらかの安堵感を覚える。

一方、戦後、父親の生死も知らないままミナハサに残された二世たち、さらに三世たちは、幾多の苦難を乗り越え¹⁹⁾、今日に至っている。そしてそうした子孫の一部は現在「日系インドネシア人」として来日している。茨城県大洗町にインドネシア人コミュニティが形成されるのは、1990年代と言われるがその中核となったのはミナハサ出身者の「日系インドネシア人」たちである。水産加工工場で働く男子工員の名札は「金城〇〇」「中里〇〇」とあり、沖縄人の子孫であることを示す。彼ら彼女らは、建物を借りて教会とし、日曜日には綺麗に着飾って教会に集う²⁰⁾。東日本大震災直後に

は帰国を余儀なくさせられた者もあったが近年ではその数は増加に転じている。また長期滞在の結果、大洗で家族をもち子どもを小学校に通学させる「日系インドネシア人」の存在も認められる。こうしたインドネシア人コミュニティの存在は珍しい。大洗のインドネシア人コミュニティの存在は、戦前にあったとされるミナハサー人と日本人との親近的感情が言説レベルにとどまらなかったことを実証するのか、それとも、それとは無関係に、あらたな結びつきが生まれつつあることを認めるべきなのか、それを確認するためには、インドネシア人コミュニティの生長をもうしばらく見ていく必要があるだろう。

注

- 1) 二つの墓地は長らく顧みられない状態がつづいたが、2003年北スラウェシ日本人会が中心となってようやく移設整備されるに至っている。
- 2) 「メナド」は、戦前の日本語文献及び日本人の慣用に基づく綴りであり、最近のインドネシアでは「メナド」(Manado)と呼ばれる。なお、戦前、戦後を通じてメナドは、スラウェシ島においてマカッサルにつぐ第2の都市である。本稿では、戦前の日本語文献にしたがい「メナド」で統一した。
- 3) この数値は男性だけあり、女性、同伴家族等は含まれない。ただし、女性人口は男性人口に比して著しく少なかったと考えられる。
- 4) 『ジャカタラ閑話』によれば、昭和13、14年代頃のミナハサーにおける日本人経営事業として、緑永商会農園(糸永太郎)、勝間農園(勝間順蔵)、河合農園(河合堅治)、倉元農園(倉元国義)、栗本農園(栗本唯)、ケレロンデー農園(小林常八)、宮井農園(宮井源太郎)、そして会社としては日の出商会、南洋貿易(宮島清次郎)、日蘭漁業(勝山三郎)、東インド水産株式会社(伊藤某)、ヤマチョー(布販売)、トコ・カネコ(一般雑貨)などを挙げている。
- 5) たとえば作家高見順とともに戦前蘭領インドを訪れた画家三雲祥之助による『ジャワ日記』(1942)もそこで出会ったA氏の言として次のように述べている。
「A氏はこれらの人々(ミナハサー人＝筆者注)の先祖は日本人だと言っていた。何でも潮流の関係で、今でも台湾邊の漁師がよく漂着するので、昔から。沖縄や台湾邊の漁師が漂着してそのままいついたのだと言っていた」(24頁)
そして、高見順もこの日本人漂流説に同意するようにつぎのように述べている。
「昔、ここに漂着した日本人が、鎖国のために帰れず、住みついたのであろう。土民の姓に、日本人の名から出たらしいアンド、ゴトウ(？記憶不明)と言ふようなものがあるという。」(『全集第19巻』:130)
- 6) ここに掲げられている数値は、筆者が確認した数値とずれがある。墓碑銘に「海軍軍属」と明記されているのは6基であり、うち姓から沖縄出身者と考えられるのは5基である(後述)。
- 7) なお、その後、インドネシア政府との交渉の結果、墓地の発掘作業も実現したが、遺骨等は見出されなかったという。
- 8) 大岩トミー氏及び父親の大岩勇については、藤林泰(2004)に詳しい。同論文を参照した。
- 9) 藤林論文とくにpp.81-82を参照。
- 10) 「大型の鰐(かつお)を3枚におろし、さらに背側と腹側に分けた身で作った鰐節」(広辞苑)。
- 11) この点については、その後の宮内、藤本氏らの鰐節研究グループにより、かなり明らかにされた。
- 12) この戦災リストは後に刊行予定の『糸満市史』に掲載されるべき基礎データであった。ただし、その後上梓された『糸満市史』について筆者は未確認である。
- 13) 長崎節夫氏のリストには「2003年7月20日までに確認されている墓」と追記されている。
- 14) 長崎節夫氏によるビトゥンの日本人墓地発掘は、1997年6月頃と推測される。その当時、筆者は長崎氏の活動をまったく知らず、氏の墓地調査に協力できなかったことは残念である。

- 15) 脇田清之氏が主宰するインターネット版「スラウェシ情報マガジン」による。
- 16) この発展要因のひとつとして、片岡はバタヴィア市営市場の設置を挙げている。【片岡：95】参照。
- 17) 玉城徳についてはつぎのような記述がある。
「大正5年沖縄県人（糸満港）玉城徳等6名新嘉坡「スマトラ」、「ボルネオ」島ヲ経テ当地（メナド及その附近＝筆者注）ニ来タリ盛ニ鼈甲及ビ高瀬貝等ヲ素、潜水ニテ捕獲シニカ年未滿ニ約5万キルダ（盾）ヲ挙ゲソノ後高瀬貝、蝶貝及ビ鼈甲下落等の下落セると漁獲高著しくセるとによりて大正八年同県糸満稿の漁夫12名を連れ来たり赤室魚の網を入れたるにこれ亦成績良好なりしが幾年ならずして同県人雇い入れ漁夫中に分裂するものを生じ…（後略）。」拓務省拓務局 1931 「南洋ニ於ケル水産業調査書」を参照。
- 18) 藤林によれば、1939年外務省調査によると、メナド日本人小学校の日本人小学生について「児童の大部分（15名）はミナハサー人を母親とする」との報告があるという。
- 19) 戦後のミナハサーにおいて、日本人との混血であることは差別の恐れから、しばしば隠されたという。
- 20) 2003年6月、インドネシア人研究者リワント博士に同行して大洗を訪問したときの簡単な聞き取り調査による。この時点で大洗にはミナハサー人を中心とする4つの教会（3つはプロテスタント、1つはカトリック）があった。また出身県ごとの同郷会活動も盛んでその数は10に及ぶ。

参考文献

沖縄タイムズ

- 「沖縄に引き取りたい セレベスに眠る亡夫の遺骨」1983年3月11日付け、沖縄タイムズ社。
 「セレベス島に眠る肉親の遺骨 “早く引き取りたい”」、1983年3月14日付け、沖縄タイムズ社。
 「来月下旬に「遺族会」結成 収骨・墓参実現へ」、1983年3月22日付け、沖縄タイムズ社。
 「セ島遺骨収集 実現可能の見通し 山本局長 瀬長氏に交渉約す」、1983年3月27日付け、沖縄タイムズ社。
 「県出身者の墓標も 日本人戦没者新たに18基を確認 インドネシア・メナド地区」、1983年10月5日付け、沖縄タイムズ社。
 「確認された県人の墓地 まず二人派遣 念願の墓参が実現インドネシアセレベス島」、1985年5月26日付け、沖縄タイムズ社。
 「墓参実現へ。県内の遺族は6家族で遺族会を結成」1985年5月26日付け、沖縄タイムズ社。
 「セレベス島の墓参決まる 県から5遺族 18日に出発」1985年7月5日付け、沖縄タイムズ社。
 「40年目のセレベス墓参 5遺族がたつ」1985年7月19日付け、沖縄タイムズ社。

尾本恵市・濱下武志・村井吉敬・家島彦一（編）

2001 『海のアジア⑥アジアの海と日本人』、岩波書店。

片岡千賀之

- 1982 「戦前期シンガポールを中心とした日本人漁業（Ⅰ）－南洋漁業の一類型－」、『漁業経済研究』第27巻3号。
 1983 「戦前期シンガポールを中心とした日本人漁業（Ⅱ）－南洋漁業の一類型－」、『漁業経済研究』第27巻4号。
 1991 『南洋の日本人漁業』、同文館。

久手堅正憲

「座間味村史」、座間味村。

渋川環樹

1941 『蘭印踏査行』、有光社。

Shimizu, Hiroshi

1997 "The Japanese Fisheries Based in Singapore, 1892-1945," *Journal of Southeast Asian Studies* 28, 2 (September 1997), National University of Singapore.

高見順

1974 (1941) 「蘭印の印象」、『高見順全集第19巻』、勁草書房。

拓務省拓務局

1931 「南洋ニ於ケル水産業調査書」(抄録)、拓務省拓務局。

1932 「セレベス島事情」、海外拓殖事業調査資料第18輯、拓務省拓務局。

田港朝和

1980 「沖縄移民年表」、『新沖縄文学』45号、沖縄タイムズ社。

長崎節夫

1997 「ビトゥンの日本人墓」、北スラウェシ日本人会編『タルシウス』、第9号、ビトゥン。

藤林泰

2004 「インドネシア・カツオ往来記」、藤林泰・宮内泰介編著所収、コモンズ。

藤林泰・宮内泰介編著

2004 『カツオとかつお節の同時代史』、コモンズ。

松田勲

2008 「スラウェシに於ける領事館の推移と戦前(昭和14年頃)の日本人会の状況」北スラウェシ日本人会編『タルシウス』、第20号、ビトゥン。

三雲祥之助

1942 『ジャワ日記』、大日本出版株式会社。

Tirtosarmo, Riwanto

2005 "The Making of a Minahasan Community in Oarai : Preliminary Research on Social Institutions of Indonesian Migrant Workers in Japan," 異文化コミュニケーション研究第17号: 105-138, 神田外語大学。

琉球新報

「インドネシア・旧セレベス島 雑草茂る中から墓標 県出身者らの墓15基 出稼ぎで海軍に徴兵 平良市の長崎さんが発見」1997年6月20日付け、琉球新報社。